ところ会　10 月行事案内

ひたち海浜公園散策と水戸弘道館見学

10 月のバス旅行は国営ひたち海浜公園のコキアを観賞し、那珂湊お魚市場での海鮮昼食と買物、最後に水戸の弘道館を見学するコースを設定しました。

記

■日　　時：平成 30 年 10 月 12 日（金）
　7：50 所沢駅東口郵便局前。

■見学場所及び時間　≪コース全長、バスの走行距離で約 311km≫
　所沢駅東口郵便局前(8:00)➡ 所沢 IC‥関越自動車道‥東京外環自動車道‥常磐自動車道‥北関東自動車道‥東水戸自動車道‥常陸那珂有料道路‥ひたち海浜公園 IC➡国営ひたち海浜公園（散策 2 時間）➡那珂湊お魚市場(昼食・買物:約 1 時間 20 分)➡水戸弘道館(見学:45 分間)➡旧水戸城薬医門（見学：10 分間）‥水戸黄門神社経由➡水戸南 IC‥北関東自動車道‥常磐自動車道‥東京外環自動車道‥関越自動車道‥所沢 IC➡所沢駅東口郵便局前‥‥解散

■ひたち海浜公園内の散策コース‥

- ❑公園内の拝観コースはシーサイドトレインで西口・翼のゲート【10】から乗車し、みはらしの丘【8】で下車し、下車後はみはらしの丘のコキアを各自自由に散策し、所定の場所・時間へ集合することにします。時間に余裕があれば自由に観覧車にもお乗りください。トレインの運行コースは西口・翼のゲート【10】➡【1】➡【2】・・・・みはらしの丘【8】で廻るコースで全周≒40 分程度です。
- ❑先に観覧車に乗りたい方はシーサイドトレインで西口・翼のゲート【10】から乗車後、中央ゲート【1】で下車し、自由に観覧車で園内の景色を楽しんでください。観覧後は自由行動となります。

■昼食：那珂湊　和風レストランやまさ　刺身定食 or 海鮮丼

■参加費：5,500 円(昼食代、拝観料、乗り物代を含む)

■散策先簡単ガイド

＜国営ひたち海浜公園（ひたちなか市）＞

花と緑に囲まれた都市公園「国営ひたち海浜公園」は、開園面積約 200ha の広い園内は 7 つのエリアに分かれており、自然の中で楽しめるレジャー

スポットや花畑があります。春にはスイセンやチューリップ、ネモフィラ。夏にはバラ、ジニア、ヒマワリ。秋にはコキアやコスモスと四季折々の草花が、訪れる人々の目を楽しませてくれます。

≪風物詩のネモフィラとコキア≫

さまざまな花が咲いている国営ひたち海浜公園。中でも、春のネモフィラと秋のコキアは必見です。広大な“みはらしの丘”一面に広がる、450 万本の青いネモフィラが広がる光景はまるでファンタジーの世界。そして秋には、モコモコとしたコキアが紅葉し、大地を真っ赤に染め上げます。

＜那珂湊おさかな市場＞‥那珂湊漁港に隣接する魚市場

その日の朝に水揚げされた新鮮な魚介類をリーズナブルな価格で販売する量販店街として人気があり、関東を代表する観光市場として県内外から毎年およそ 100 万人が訪れています。また、旬の海鮮料理や、大きく新鮮な魚介類が自慢の回転すしなど、港町ならではのお食事処も多数軒を連ねています。

＜弘道館＞

旧水戸藩の藩校である弘道館は、第九代藩主徳川斉昭が推進した藩政改革の重要施策のひとつとして開設されました。

弘道館建学の精神は、天保 9 年(1838)に斉昭の名で公表された「弘道館記」に「神儒一致」「忠孝一致」「文武一致」「学問事業一致」「治教一致」の 5 項目として示されています。弘道館は、安政 4 年

(1857)5 月 9 日に本開館式の日を迎える。

藩校当時の敷地面積は約 10.5ha で、藩校としては全国一の規模でした。敷地内には、正庁(学校御殿)・至善堂の他に文館・武館・医学館・天文台・鹿島神社・八卦堂・孔子廟などが建設され、馬場･調練場・矢場・砲術場なども整備され、総合的な教育施設でした。

弘道館では藩士とその子弟が学び、入学年齢は 15 歳で卒業はありませんでした。学問と武芸の両方が重視され、学問では儒学・礼儀・歴史・天文・数学・地図・和歌・音楽など、武芸では剣術・槍・柔術・兵学・鉄砲・馬術・水泳など多彩な科目が教えられていました。

その後、幾度の戦火を免れた正門、正庁及び至善堂は、昭和 39 年(1964)に国の重要文化財に指定され、現在約 3.4ha の区域が「旧弘道館」として国の特別史跡に指定されています。

至善堂に掲げられた要石歌碑の掛け軸

八卦堂

学生警鐘

種梅記碑

要石歌碑

正門：正門は本瓦葺四脚門である。柱などには、1868 年（明治元年）10 月の弘道館戦争の折に、城側から撃たれたと思われる弾痕が残っている。

正庁（学校御殿）：正庁は弘道館の管理棟である。正庁の北と南にそれぞれ文館と武館を、南庭に武術訓練のための対試場を配している。正庁の北東に位置する四室は至善堂と呼ばれた。

至善堂：正庁の北東に位置する四室。藩主の控室、その子弟の学習の場として使用された。襖や壁面には、和歌の扇面を掲げたと言われる。現在、襖には要石歌碑の碑文を記した掛け軸が掲げられている。

孔子廟：神儒一致の教義に基づき、1857 年（安政 4 年）に鹿島神社とともに建立された。瓦葺き入母屋造り。屋上に鬼狄頭（きぎんとう）、鬼龍子（きりゅうし）を据えている。「再建」

八卦堂：「弘道館記」を刻んだ石碑を納めた覆堂である。銅板葺きの八角堂。「再建」

学生警鐘：弘道館内に時刻を知らせるものとして利用されていた。鐘楼は孔子廟の西側に建てられている。鐘の背面には「物学ぶ　人の為にと清かにも　暁告ぐる　鐘のこえかな」という斉昭の直筆がある。「実物の鐘は弘道館内に展示」

鹿島神社：常陸一の宮である鹿島神宮から、1857 年(安政 4 年)に分祀された。社殿は 1945 年（昭和 20 年）の空襲により焼失し、1974 年（昭和 49 年）の伊勢神宮の式年遷宮の際に旧殿が譲渡され翌年に移築された。

種梅記碑：斉昭の自撰自筆による、偕楽園や弘道館など水戸に多くの梅を植えた由来を記したもの。梅を鑑賞するほか、実を梅干しにして戦に役立てるなどの目的などが記述されている。碑石は損傷しており、上半分が風化して文字が読めない状態である。拓本は至善堂で見ることができる。

弘道館記碑：斉昭が弘道館建学の精神を記した『弘道館記』を刻んだ石碑である。園内の八卦堂内に設置されている。碑は高さ 318cm、幅 191cm 厚さ 55cm の巨大な寒水石製であり、斉昭自筆の書を刻んでいる。八卦堂は普段は閉じられており碑の現物を見ることはできないが、拓本を弘道館の正庁正席の間で見ることができる。碑は 1945 年（昭和 20 年）の戦災で八卦堂に直撃した焼夷弾のため損傷し、その後、1953 年（昭和 28 年）と 1972 年（昭和 47 年）に修復がされた。2011 年（平成 23 年）の東日本大震災で大きく崩れ、その修復作業が文化庁によってなされ 2013 年（平成 25 年）10 月に完了した。その際、1953 年（昭和 47 年）修復時に本体背面に施されたコンクリートが除去されてそれ以前の姿にほぼ復元され、11 月 18 日には復旧記念式典が開かれた。

要石歌碑：鹿島神社に近い場所に設置されている。徳川斉昭による歌が刻まれている。

歌の内容は「行く末も踏みなたかへそあきつ島　大和の道そ要なりける」（原文「行末毛 富美奈 太賀幣会 蜻島 大和乃道存 要 那里家流」）。

“行く末も踏みな違えそ（踏み違えるな）あきつ島　大和の道ぞ要なりける”が分かりやすいのではと思います。（居田記）

＜旧水戸城薬医門＞

桁行 3 間、梁間 1 間、切妻造、茅葺風銅板葺、箱棟付の単層薬医門です。中央柱間に内開きの大扉と左の脇間に潜扉があります。薬医門の平面構成は親柱とその背後の控柱から成り立つ簡単なものですが、屋根の棟の位置が両柱の中間より前面に寄せられるため、正面の軒が深く風格のある門構えとなっています。

建立年代を特定する資料は発見されていませんが、安土桃山時代末期、佐竹氏が水戸城にいた時期に建てられたものと考えられます。

この門の旧位置については、形式と規模そして風格からみて、本丸橋詰門とするのが適当と思われます。明治 20 年（1887）頃と昭和 19 年（1944）

の 2 回、水戸市内で所在を変えて移築されましたが、昭和 56 年（1981）に、水戸城本丸跡地である県立水戸第一高等学校敷地内（旧位置近く）に移築復元されました。

■その他散策先簡単ガイド

＜水戸城址・二の丸展示館＞

水戸城は、北が那珂川、南が千波湖に挟まれた、日本最大級の土造りの城です。

元は鎌倉時代に馬場氏の手により建てられた館に由来し、後に江戸氏そして佐竹氏の手を経て、慶長 14 年(1609 年)、徳川頼房公が水戸に封じられるとともに水戸徳川家の居城となります。頼房公は三の丸や外堀の整備拡張を行い、二の丸に御殿を造営、併せて三階物見と呼ばれる櫓を建設しました。しかしこの三階物見は明和元年(1764 年)の火災で焼失、後に再建された際に屋根を瓦葺とし、天守閣らしく鯱を上げ三階櫓(御三階櫓)と呼びました。

三階櫓は外観三層・内部五階の大型の櫓で、石垣がない代わりに一層目の下部を海鼠壁で覆い、あたかも石垣の上に建っているかのように見せていました。戦前は旧国宝に指定され、昭和 20 年(1945 年)に戦災で焼失するまで水戸市のシンボルとして親しまれました。

＜彰考館＞　コトバンクから

江戸時代初期，水戸藩主徳川光圀が設立した修史のための研究所。光圀は『大日本史』の編集を思い立ち，明暦 3（1657）年江戸駒込の藩邸に史局を設けて着手し，寛文 12（72）年これを小石川の藩邸に移して彰考館と名づけた。『左伝』のなかの「彰往考来」の字句にちなんだものである。多いときは 59 人の館員を擁して『大日本史』の編集が盛大に行われた。彰考館はのちに水戸城中に移されて隠居した光圀が指示を与えていたが，その没後江戸の藩邸と水戸の城内とに分置され，江館，水館と呼ばれた。幕末，斉昭のとき江館は廃止され，もっぱら水戸で修史事業が続けられ，1906 年，『大日本史』完成とともに閉館された。彰考館文庫が残ったが戦災で焼失，その蔵書は大部分難を免れて水戸徳川家別邸にある。

＜常盤神社・黄門様（義公）生誕の地＞

徳川光圀（義公）は、水戸藩初代藩主頼房の第３子として、寛永５(1628)年この地にあった重臣三木仁兵衛之次の屋敷で生まれました。母は谷久子（靖定夫人）ですが、故あってひそかにこの屋敷に寄寓し、光圀を生んでも身分を秘し、三木夫妻が養育しました。光圀は幼名長丸（のち千代松）と称し、５歳の時公子として水戸城に居住し、寛永10(1633)年 ６歳の時正式に世嗣として江戸の藩邸に移り、父の教育を受けました。

水戸関連施設、関連図

：徒歩で散策・移動
：バスで移動